

英国留学だよりⅡ

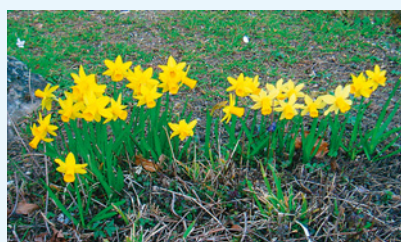
文化創造学部助教授 中郷 慶

文化創造学部多元文化専攻の中郷慶助教授がこの夏、イギリス・レディング大学の客員研究員としての留学を終えて帰国しました。今回はレディングの気候と豊かな自然の中を歩く散策の楽しみ、そして学生の授業への参加態度などについて伝えてもらいました。

1年にわたるレディング滞在で、四季を通じて楽しんだのは散策でした。頬を駆け抜ける風の柔らかさを感じながら、テムズ川沿いを歩くのは最高の贅沢でした。



森一面に群生するブルーベル



春の訪れを告げるスイセン



テムズ川に遊ぶガチョウとハクチョウ



レディング修道院廃墟

私

が1年を過ごしたレディングは、かつては3B（ビール、バルブ（球根）、ビスケット）の生産で名をはせ、現在では世界的なIT関連企業が数多く集まっている地方都市です。北海道のさらに北、樺太・サハリンの中央部とほぼ同じ緯度にあります。緯度の割には比較的温暖な気候です。ただし、高緯度のため、冬には日の出が午前8時過ぎ、日没が午後4時前と日照時間が短く、午後3時頃にはすっかり夕方の気配となります。秋から冬にかけては、暗く、天気も悪いので気持ちも沈みがちで陰鬱でした。3月になり、日没

時間が遅くなりスイセンが咲き始めると冬の呪縛から解き放たれたような気持ちになりました。明度がこれほどまでに人間の心理に影響を与えるとは思いませんでした。

1年にわたるレディング滞在中で、四季を通じて楽しんだのは散策でした。日本と比べて、気温・湿度が低く、自然が豊かなために、どれだけ長い時間、距離を歩いても疲れませんでした。自宅周辺では各家庭が趣向を凝らして作った庭を眺めながら歩きました。自宅からほんの20、30分も歩くと、森や牧場に行くことができました。

自

宅のすぐ近くには、野球場の8面前後も取れるほどの広大な公園がありました。芝生が一面に広がり、研究に行き詰まった頭を整理するには最適な場所でした。春から夏にかけて、次々にバラが咲き、名前も知らない紫や白い野花が咲き乱れる季節、頬を駆け抜ける風の柔らかさを感じながら、テムズ川沿いを歩くのは最高の贅沢でした。レディングの町の中心部、駅のすぐ近くには、1121年にヘンリー1世によって設立され、1538年にヘンリー8世によって解散させられたレディング修道院の廃墟があり、往時の隆盛を偲ぶことができました。廃墟のすぐ横には、詩人、小説家、劇作家であったオスカー・ワイルド（1854・1900）が同性愛の罪で収監されていたレディング刑務所があり、現在も使われています。

私

が客員研究員として在籍していたレディング大学で授業を聴講していて印象的だったのは、学生の授業への積極的な参加です。学部の授業では、それほど基礎的なところであっても、学生は恥ずかしがらなく質問をしますし、教員もその質問に対して、実に丁寧に答えていました。また、大学院には、さまざまな社会経験・教育経験を持つ大学院生が世界各国から集まっていますので、授業でもそれぞれの経験や知識に基づいた活発な議論が楽しめました。学生たちは、質問をしたり議論をしたりすることが当然であるという環境で教育を受けてきたのでしょうか、学生たちが自由に意見を述べられる雰囲気を作り出し、学生を授業に巻き込みながら授業を進めていく教員の姿は大いに参考になりました。

イ

ギリスでの数々の経験は、私の今後の研究・教育にとつても、また、私自身の人生にとつても、かけがえのない糧となるはずだと思います。この機会を与えて下さった愛知淑徳大学の教職員のみならず、改めて厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。